
悲しみのストラトキャスター

jeff

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しみのストラトキャスター

【Nコード】

N4148V

【作者名】

jeff

【あらすじ】

隆一が先輩から借りたストラトキャスター。図太いサウンドが観客の心を痺れさす。だがその日以来仲の良かったメンバーの關係に亀裂が・・・

そんな時ギターのオーナーが明かした衝撃の事実とは？

第1話（前書き）

短期連載予定です。

第1話

「すげー。これかよ？ 60万もするギターってのは・・・」
ベースのケンが目の色を変えながら近づいてきた。

俺達のバンドは中学時代からの同級生の集まりで、俺とケンとは小学校以来の親友だ。

お互いの事は知り尽くしてると言っていていいほど仲が良かったし、このバンドのお陰で

多分親より長い時間顔を突き合わせていたかもしれない。

メンバーの芳樹と正也は別の高校へ行ったが、勉強嫌いの俺とコイツは市内の工業高校に通っていた。

「おいおい、まだ俺も音を出してないんだから・・・勝手に触るな
って」

「いいじゃんかよー。・・・にしても・・・シブイ色だなあ」
そう言いながら漆黒に塗られたボディをケンは舐めるように見ていた。

「川上先輩が貸してくれるって言うからさあ、俺はてっきりもう1
本のテレキャスかと思
ってたんだよ。そしたら・・・このストラトだって。 まじビビッ
たわ」

「そんなこといいからさあ・・・音出そうぜ。 あいつら来る前にな
んか1曲ヤリテー」

俺はスタジオのマーシャルにシールドを突っ込んだ。

スイッチを入れアンプが温まってくると、ソイツの鼓動のような図太いサウンドが

スタジオ全体を包み込んでいた。

「ヤッベツ・・・めっちゃ良い音するじゃん！ これ、いつものフエンダーと同じ

楽器なんだよな？」

少し興奮気味にケンが言った。

「・・・別物だ。 シングルコイルの響きじゃねー・・・どうなってるんだ？このギター

それでいてハムバッキングみたいな感じでもない。 クソッ！・・・

これが俺のギター

だったらなあ」

「川上先輩はいつまで貸してくれるって言ってたん？」

「とりあえずコンテストが終わるまでは使って良いって言ってたけど・・・」

「それだけでも感謝しなきゃ。 ちょっと1曲やろうぜ！」

そう言いながらケンがB からのブルースを奏で始めていた。

そうだよ・・・この日から俺達の運命は変わっちまってたんだ。

このギターが・・・まさか・・・あの伝説のバンドのギタリストの物だったなんて

この時はまったく知らなかったんだよなあ。

第2話

> i 2 8 4 9 7 — 5 1 1 <

このギターを借りてから、俺達のバンドの演奏は今までとはまったく違うアグレッシブなものになっていた。

特にドラムの芳樹の叩き方が大きく変貌してる。

元々おとなしい性格だったこともあって、ドラミングに関してもどちらかといえは

控えめで曲によつては少し歯がゆさを感じることも多かったのだが、ギターの図太い

音に触発されたのかバスドラの音量が倍になってんじゃない？ってぐらいペダルを

踏み込んでいた。

それとボーカルの正也だが・・・スタジオで練習してるだけなのにまるで目の前に

数万人の客が居るんじゃないかってぐらいオーバーなアクションをキメてやる。

俺はこの時点で8月のバンドコンテストのグランプリは間違いなくこの手の中にある

という確信に近いようなものを感じていた。

「なあ、今日の練習はこれぐらいにして久しぶりにみんなでメシでも食おうよ」

ベースをアンプに立てかけながらケンが俺の方を見た。

「そうだな・・・じゃあいつものファミレスで作戦会議といくか」

まだ高校生だった俺たちはスタジオ代や楽器のローンで練習以外の日はほとんど

バイトだったから、全員でゆっくり話をする時間も最近はめっきり少なくなっていた。

高校最後の夏休みをジャックレコードの主催するバンドコンテストに捧げている・・・

そんな表現がピッタリと当てはまるような生活をしていた。

「それでさー・・・あのギターっていくら位すんの？」

正也がナゲットを啜えながら聞いてきた。

「俺もよく知らないんだけど・・・同年式のストラトの相場が60万ぐらいなんだ。

だけどあのギターはどう見てもそこらのとはワケが違う。いったいどの位するのか

分らないよ」

「えっ？ 川上さん教えてくれないの・・・値段」

不思議そうな顔をして芳樹がこっちを見た。

「聞いたんだけど・・・貰ったんだってさ。 知り合いのギタリス

トに・・・

だから値段のことは分らないって言ってた」

「貰ったって！？・・・チョーラッキーじゃん！ だからお前に貸してくれたんだあ・・・

納得だわ。 てか、お前・・・買いますって言えばいいじゃん？

タダだったんだし

ひよつとしたら安く譲ってくれるかもしれないよ?」

「俺も正也の言うこと分るわ・・・一度聞いてみるよ川上さんに」
ケンがキャラに似合わない真剣な顔で言った。

「このコンテストが終わったら言おうと思ってた・・・逆に・・・
あのギターがなきゃ

バンドは続けられない・・・そう感じてたんだ・・・」

俺は心の中で感じていたことを初めてみんなに伝えた。

それほどバンドにとって・・・いや、今の俺にとって無くてはならないものに

なってたんだ・・・あの黒いストラトキャスターは・・・

第3話

「やべーよ・・・身体の震えが止まんねーよ・・・どうすんだよ・・・」

「落ち着け芳樹！俺達の出番まであと1時間近くあるんだ。今からビビッてて

どうすんだよ」

そう言ってる正也の顔もまるで血の気が引いたみたいに硬直してる。

今日はジャックレコード主催のアマチュアバンドコンテスト決勝の日だ。

俺たちは今月初めの予選から既に3度のステージに立ち、今日の12組に選ばれていた。

他のバンドの中にはプロと間違えるほどのテクを持ったミュージシャンも居て

このコンテストのレベルの高さを嫌というほど見せ付けられた。

高校生の俺たちがここまで来れたのが奇跡じゃないか？ってぐらいどのバンドも凄かった。

「なあ・・・俺達ここまで来たけど・・・どう見たってテクじゃ勝てねー・・・」

ただどさ、なんかこう・・・身体の中で疼くんだよな。今日の客達に俺達の音を

聴かせてーって・・・」

ギターのネックを握り締めながら俺はみんなに言った。

手のひらは緊張からか汗でベツトリと濡れている。

「そうだよなあ・・・間違えないようにとか、そんな事どうだっていいよな？」

ステージに立った瞬間に感じたことをそのまんま吐き出せばいいんだよな・・・」

正也が少し落ち着きを取り戻したように小さな声で呟いている。

そうさ・・・これが学生生活最後の祭りだ。

来年は就職や進学のことできっとバンドどころの話ではないだろう。中学からずっとやってきたバンド・・・俺にとって掛替えの無い仲間達。

そいつらとここまで一緒にやってきたんだ。

思い残すことなんて何も無い・・・

「俺な・・・お前等と出会えて良かったって・・・ずっと思ってた・・・」

「隆・・・恥ずかしい事言っただよ・・・」

ケンが笑いながらこっちを見た。その目は少し充血していた。

俺たちがステージに上がる頃、会場の外は夕闇が辺りを包み込んでいた。

第4話

「さあ・・・それでは発表します！ 今回のチャンピオンは・・・

ソニックエンジン！ 高校生バンドが優勝だあ！！」

会場から大歓声が聞こえている。

俺たちはまるで他人事のようにその歓声を聞いていた・・・

「それでは審査委員長よりコメントをお願いいたします」

司会のボビー・ジェームスがトロフィーを渡したばかりの中山俊二にマイクを向けた。

中山俊二は音楽プロデューサーとしても有名だが、元はサイノスというバンドの

ギタリストで日本でも屈指のテクニシャンである。

「おめでとう！ 今回はいいバンドが多かったんだけど君らには他とは違うパワーを

感じたよ。特にギターの隆一君だっけ？ めちゃめちゃいい音出してた。

もうそのままレコーディング出来るよ・・・ってことでいい話っ！
今回主催のジャックレコードさんが是非君達をデビューさせたいそう
うだ。

どう？最高のプレゼントだろ？ おめでとう！」

その辺りからの記憶が曖昧なんだけど・・・

まるで夢の中に居るような感覚で、正気に戻ったのは家に帰ってシ
ヤワーをしている

頃だった。

「デビューかぁ・・・」

なんだか急に誰かと話がしたくなってケンに電話をしていた。

「あつ・・・隆一かぁ・・・おはよう・・・」

「悪い・・・こんな時間に・・・」

「いいよ・・・てか、夜中の3時じゃん！ 明日学校だぜ・・・」

「俺達・・・優勝したんだよな？」

「そうだよ・・・」

「デビュー出来るんだよな？」

「うん・・・デビューするらしい・・・あれ？・・・夢じゃねーよな？」

隆一・・・あれマジ話だよな？ ウォーーーー！！！！！！」

電話の向うで大声を出しながら叫んでやがる・・・

「ウルセー！！近所迷惑だろ！！・・・やったな？ やったんだよな？俺達・・・」

「隆一いっ・・・寝れねーよ」

「テメー今まで寝てたくせに・・・」

結局俺は一睡もせず登校するハメに・・・

デビューCDのレコーディングは11月からの予定だった。

その前に数本のライブもスケジュールに入っている。

芳樹も正也も進学どころの話ではないようだった。

こんなチャンスは一生に一度あるかないか・・・

全員の気持ちは決まっていた。

だがその前にやっておかねばならない事があった。

あのギターを自分のものにしなくてはいけない・・・

あれがなきゃバンドは無理だ。

来週先輩の家を訪ねよう。そしていくらでもいいから譲って欲しい

と頼もう・・・

もう金とかじゃなかった。

あのギターは誰にも渡したくなかったんだ・・・

> i 2 8 5 0 0 — 5 1 1 <

第5話

「隆ちゃん聞いたよ、優勝したんだって？ 凄いじゃん！今回はかなりレベル高いつて

知り合いのミュージシャンが言ってたけど、まさか隆ちゃん達が優勝するとは思わな

かったよ。ホントおめでとう」

俺はギターの事を話するため中区にある川上先輩の勤めている練習スタジオに来ていた。

はたしてこのギターを売ってくれると言うだろうか？

挨拶をしてから既に20分以上が経ったが未だその事を言えないままにいる自分が歯がゆかった。

「ところで隆ちゃん・・・そのストラトの件なんだけど、もう暫く使ってみない？」

「えっ？・・・いいんですか？」

「うん。隆ちゃんさえ良かったらもう少し弾いてやって欲しいんだ・・・」

「先輩・・・実は今日お願いがあつて来たんです。このギターを譲ってもらえませんか？」

俺・・・今は金無いけど・・・何年かかっても必ず払いますから・・・」

俺は川上先輩に深々と頭を下げ答えを待った。

数分の・・・いや俺にとっては何時間にも感じられる無言の状態が続いたあと

川上先輩が意外なことを言い出した。

「隆ちゃん・・・前にも言ったけど・・・俺はそのストラトを知り合いのギタリストから

貰ったんだ。そんな物を売ったりすることは出来ないよ・・・だからといって隆ちゃんに

あげる・・・そんな事も言えない。ごめんな・・・別に手放すのが惜しいとかじゃないんだ。あのギターをくれたやつのがなんだ・・・」

「すみません・・・絶対無理だってことは分かって・・・」

「そうじゃないんだ・・・売ったりあげたりすることは出来ないけど・・・」

ずっと使っていて欲しい・・・あいつの為にも・・・」

「えっ?・・・」

俺は訳が分らなくなっていた。

どういう意味なんだ?　ずっと使って欲しい?　あいつの為?

暫くその言葉の意味を自分なりに理解しようと一生懸命に考えていた。

「あのな・・・あのストラトの持ち主・・・死んじゃったんだよ。

俺の学生時代からの親友だった・・・突然うちのスタジオにやってきて・・・」

先輩はその時のことを話し出した。4年前のことだったらしい・・・

「まあ俺はこんな所で燻ってるけど、あいつは東京で結構有名なバンドやってて

メジャーデビューの話まであるって風の噂で聞いてたんだ。

高校卒業してから随分会ってなかったけど、俺は自分の事のように嬉しかった。

そんなあいつが突然店に現れて・・・少し疲れたような顔してたなあ・・・

このギター使ってくれて・・・俺もその時は訳が分らなかったけどそのあと1週間ほどして・・・」

そこまで言う先輩は下を向いて黙り込んでしまった。少しの時間が流れ先輩はまた話し出した。

「あいつが自殺したって・・・東京に居る友達から連絡があたんだ・・・

それを聞いてなんであいつがメインで使ったギターを俺に渡しに来たか

その時初めて分ったんだ・・・」

俺は先輩の話を聞いてこのギターを手放せない理由がよく分った。じゃあ何故自分で使わないんだ？

先輩だって地元じゃ名を馳せたギタリストだ・・・

「先輩はこのギターを使わないんですか？」

「使ったさ・・・だけど・・・俺には重過ぎる・・・このギター持つとあいつのこと

考えちまう・・・だから弾けなくなった・・・弾いてやれなくなっただんだ・・・」

結局俺はこのストラトを無期限で使っていていいという返事を貰って先輩のスタジオをあとにした。

第6話

11月のレコーディングを控えて猛練習が始っていた。

なんせテクニックの無さはコンテストで嫌というほど見せ付けられていたから・・・

それに9月の半ばには2万人規模のライブイベントがある。

これはジャックレコード所属バンドのお披露目のようなもので、メインはもちろん

ブラネットCだ。それ以外にも有名バンドが7組。その中には俺達より1年早く

デビューした関西のバンド、ディーボリーも居た。1度インディーズ時代に観たけど

とんでもなく上手いバンドだった。当日はオープニングアクトを勤めるらしい。

俺達のバンドは3番目だ。凄いバンドを2つ聴いた後だから客だつて期待してるに

違いない。ヘマは出来ない・・・

だけど先日のコンテストの時のような緊張感はまったく無かった。

ステージに立って照明が当たった時のあの快感、スピーカーから音が出た瞬間浮かび

上がるような感覚・・・早く味わいたいと思っていた。

「そのパートだけど・・・芳樹のシンバルをもう1発入れたほうがいいんじゃない？」

「最近正也も音楽のこと分ってきたじゃん。じゃあそこだけもう1回やってみつか」

バンド内の空気も以前にもましていい感じた。

学校が終わってからこのスタジオで毎日4時間の練習。身体はクタ

クタだったけど

充実感が漲っていた。

このメンバーとならどこまでも行けそうな気がしていた・・・

9月23日。連休初日のこの日のライブには立ち見も含めて2200人が詰め掛けていた。

明らかにプラネットCの追っかけだと分る女の子達も大勢居たが、オープニングから

爆音を響かせたディーボリーに圧倒されることも無くノリは最高だった。

2番目のJTXが終わった頃には会場の雰囲気は既に最高潮に達している。

俺達の番だ・・・

全員の掛け声と主にステージに出た。

芳樹のバスドラがリズムを刻む。

ケンのベースがそれに乗る。

ストラトのボリュームを上げる・・・

正也の叫びにも似たハイトーンが響き渡る。

そこから先は夢の中に居るようだった・・・

ライブが終わって1週間が経った頃、俺達の周りの状態は今までとはまったく違っていた。

毎日テレビやラジオのインタビューの収録、それに音楽雑誌の写真撮り……

学校どころの話ではなかった。

それどころか学校へ行ったら他校の女生徒やら何やらが何人も来ている。

高校側だっただけに手を焼いている様子だ。

「正也……お前ちよつと外に出れないか？」

「いや……家の前に女子高生がたくさん居てとても出れねーよ……
そっちは？ 隆一んとはどうよ？」

「ああ……一緒だ。どうなってるんだ？ アイドルじゃあるまいし」

「さっきケンにも電話したんだけど、あいつ田舎に行ってるらしい。山形だつて

言ってたけど……練習とかやってんのかなあ？」

「正也んとこから芳樹の家って近いよな？ あいつどうしてる？ 電話にも出ねーし」

「PCのメールは大丈夫みたい。ただ、あいつ家にドラムとか無いから……

練習できなくて焦ってると思う。やっぱジャックレコードが言うみ

たいに

どっかで合宿するか？ 場所は用意してくれるって言ってたし」

「そうしよう・・・このままじゃノイローゼになっちまう・・・」

レコーディングまでにあと2本のライブがある。

その一つは単独だ。少なくとも10曲以上演奏しなければならない。
このままの状態ならそれは不可能に近かった。

俺たちは親を説得してジャックレコードが持つてる軽井沢のスタジオ
オつき

ペンションで合宿することに決めた。

第7話

> i 2 8 5 9 6 — 5 1 1 <

「最高だよな、こんな食事が毎晩食べられるんだぜー」

「正也、お前食い過ぎだつて。一応ボーカルはビジュアルも大事なんだし・・・」

「とか何とか言つて俺にそのステーキ食べさせないつもりじゃ無いだろうね？ 芳樹君」

「ばれたか・・・」

軽井沢に来てから10日が経った。

毎日8時間以上練習できてしかも食事最高に美味い。夜は外で花火をやったり

肝試しをやったり・・・朝は朝で近くの湖まで自転車で出かけたり。高校生の俺たちがこんな贅沢をしていいのか？ ってぐらい自由を満喫していた。

「次のライブが待ち遠しいよ。10月22日だったっけ？ どんな客が来るんだろ？」

芳樹が線香花火を慎重に持ちながら言った。

「かわいい女子がわんさかとか・・・もう卒業を前に卒業しちゃう感じ？」

「あほか・・・正也はそれしか頭に無いからな・・・部屋だつてA

Vだらけだし・・・

サルかよ。 隆一なんか部屋に戻ってもギター弾いてんぜ」

「そういうケン君の部屋から俺のAVが出てきたんだけど？ しかも熟女物・・・

ママが恋しいのかなあ？」

「うつせー」

「あと1週間だ。初めての単独だからな・・・思いつきり暴れようぜ」

少し肌寒い9月に軽井沢の空気のせいかな俺は妙な身震いをした・・・

> i 2 8 5 9 7 — 5 1 1 <

22日のライブは最後の曲を演奏し終わってもアンコールが鳴り止まない。

結局12曲のオリジナルとアンコール4回というステージにで、3時間近く

観客達と熱い時間を過ごした。

移動の車の中でも興奮がなかなか覚めず、ホテルに戻っても眠ることが出来なかった。

次の日軽井沢のペンションに戻る車の中では、全員疲れ果てたような顔をして

自分達の演奏の録音を黙って聴いてたっけ。

10月にFMラジオのライブをやった頃には、俺達の事を日本人全

員が知ってるんじゃないかと思っぐらいどこに行っても人が集まってきた。

「隆一・・・なんか有名になるってメンドクセーなあ・・・何にもできねーじゃん」

正也がふてくされたように飲みかけの缶コーヒーを投げ捨てた。

「レコーディングが終わったら東京に住むとこ用意してくれるそう
だ・・・」

軽井沢もこれから冬に入る。ここに全員で居られるのもあと数日の話だ。

ずっとこんな感じでみんなでバカなことやって過ごしていたかった。

本当にそう思っていたんだ・・・

第8話

俺達のCDが店頭に並ぶ頃にはソニックエンジンは芸能界のちょっとした話題だった。

全員高校生でジャックレコードのコンテスト優勝。

ライブは来年までぎっしり詰まっている・・・

ビジュアル的にもウケがいいらしい。特にボーカルの正也のアクションは絵になった。

人気が上がるとともに俺達の自由に出来る時間はどんどん減っていった。

練習する時間もスケジュールに沿ってマネージャーの言われるままスタジオに入っていた。

早くも次のCD製作の話があり、何曲かはデモテープまで用意されている。

もちろんオリジナルじゃない・・・だけど俺達の誰かの作曲って事になるらしかった。

「正也最近喋らなくなったよな・・・」

ケンが天井を見ながら言った。

「ああ・・・冗談しか言えないやつだからなあ。こつ忙しすぎると精神的に余裕が

無くなってるんじゃないかなあ・・・俺もちよつと疲れてきたよ」

「芳樹ちよつと痩せたんじゃない？」

相変わらず天井を見上げたままケンが言った。

「今日はジャーマネに言っちょつと早くあがらせてもらっわ・・・来週から

またライブあんし・・・」

渋谷にあるスタジオをからFMラジオ局へ向かう途中で芳樹だけタクシーで

最近借りたばかりの世田谷のマンションに帰っていった。

ラジオのインタビューではほとんど正也が喋っていたから芳樹が居なくても

場は繋げるだろう。

生放送を難なくこなした俺たちはそれぞれのマンションに戻っていった。

タクシーの時計を見ると23時を少し回っている。

翌朝マネージャーからの電話で目が覚めた。

いつもなら9時頃かけて来るんだがこの日は7時過ぎに携帯が鳴った。

「隆一君・・・気をしっかり持ってくれ・・・芳樹君が・・・」

「俺は寝ぼけていてマネージャーが何を言っているのか理解できなかった。」

「いや・・・理解しようとしていなかったのかも知らない。」

「芳樹が死んだ？」

「なんで・・・」

「昨日一緒に居たじゃん？」

「迎えに来たマネージャーの車には放心したような顔をした正也とケンが乗っていた。」

病院に到着するまで俺たちは一言も話さなかった。

「自殺って何？・・・意味わかんねーよっ！」

病院を出て最初に声を出したのはケンだった。

「そんな事考えてたんなら・・・なんで俺達に言わねーんだよ・・・俺達・・・仲間だよな？　なあ・・・そうだろ？　隆一・・・なんで・・・」

「わかんねーよ・・・なんで芳樹が・・・正也・・・お前なんか聞いてないのかよ？」

「あいつ・・・疲れてたんだよ。この何ヶ月かの間に生活が一変しちゃって・・・」

俺だってそうさ、どこへ行ったって誰かが俺達のこと見てやがる。ずっと監視されてるみたいだぜ・・・もう飽き飽きする。隆一は平気なのかよ？」

「俺は・・・自分の演奏を聴いてくれるやつらが居ることが嬉しいから・・・」

それに誰かに見られてるとかそんなこと気にしたことなかった。ギターが弾けるんなら・・・そんなこと気にならない・・・」

「へえ・・・随分立派な答えだな？　だけど俺や芳樹にはこんな生活は

耐えられないんだよ！　ケンはどうなんだ？　お前も隆一と同じこと言っのかよ？」

「もう止めろって・・・芳樹は死んじまったんだ・・・もう俺達のバンドは

終わったんだよ・・・そうだろ？ 隆一・・・」

俺はその言葉を聞いた時どう返事をしているのか分らなかった・・・

このバンドを終わらせる？

もう演奏出来ない？

そんなの嫌だ！

じゃあどうするんだよ？

まさか・・・別のドラムを入れる？

俺、何考えてるんだ？

さっき芳樹の亡骸を見たばかりなんだぜ？

どうかしてるんだ・・・きっとそうだ・・・

結局その場では何も答えなかった。

帰りの車の中、俺は何を考えることも無く2月の街の空をただぼんやりと眺めていた。

> i 2 8 6 0 2 — 5 1 1 <

第9話

・ > i 2 8 6 0 5 — 5 1 1 <

ほとんどの仕事をキャンセルした俺達は、何もしないまま5月を迎えていた。

芳樹の葬儀は身内だけで行われたが、ファンクラブの連中が大々的に告別式をやっていた。

テレビでそれを観たときそこに居る人の多さに驚いた。数万人が参列していたのだ。

俺はそれを見たとき不謹慎にもそこでライブをやりたい・・・そう思っていた。

結局バンドは新しいメンバーを入れること無く、サポートメンバーという形で

有名なスタジオミュージシャンが参加する事になった。
来週からそのライブが始る・・・今回は全国ツアーだ。

久しぶりに集まったメンバーだったがほとんど口もきかず、淡々と演奏をこなしていた。

自主トレは各自やっていたようだ。

ドラムも違和感無く演奏に溶け込んでいる。

何も変わってない。

ただ違ってるのはそこに座ってるのが芳樹じゃないこと、メンバーの心が通い合っていないこと・・・

こんな状態でも客は盛り上がるに違いない。

メンバーの自殺からの復帰ライブなんだから。

状況が一変したのはツアーも中盤に差し掛かった8月のことだった。正也が覚せい剤容疑で取調べを受けたのだった。

結局証拠不十分ということで帰してはもらえたがマスコミは大喜びだった。

話題の多いバンド・・・しかも未成年だ。

ツアーは中止されず10月のファイナルまで何とか体裁を繕っていた。

「なあ・・・隆一・・・このバンド解散した方が良くないか？」
ベースのケンがダルそうに言った。

「何でそんな事言うんだよ・・・デビューして丁度1年だろ？
これからじゃねーのかよ・・・俺達・・・」

「このままじゃみんなダメになっちまう・・・正也見てみる・・・
昼真っからラリってやがる。毎晩女をとつかえひつかえでほとんど
寝てねーだろ」

「ああ・・・知ってるよ。この前注意したんだけど・・・」

「このままじゃまた死人が出るぜ。もう限界かもよ？」

「ツアーも終わったし、暫く活動休止ってことでいいんじゃない？
ゆっくり旅行でもしてさ・・・そしたら正也も前みたいにな・・・」

俺はこのバンドを失いたくなかった。

みんなとずっと一緒にやっていきたかった。
ただそれだけだったんだ・・・

ケンの自殺未遂のニュースを俺はテレビのニュースで知った。
クリスマスも近い12月の寒い朝のことだった・・・

第10話

ケンの容態は安定していた。

大量の睡眠薬を飲んでいたが発見が早かったのが幸いしてそれほど大事には

至らなかったのだ。

自殺の理由を聞いたが本人も何でそんな事をしたのか分らないといっていた。

多分疲れていたんだろう・・・

ケンの入院している病院から出て信濃町の交差点でタクシーに乗ろうとしたとき

久しぶりに名古屋の川上先輩から電話があつた。

至急会いたい・・・そうわれて俺は何か引つ掛るものを感じながら15時10分発ののぞみに乗っていた。

名古屋の先輩のスタジオに着いたのは少し周りが暗くなり始めた頃だった。

「隆ちゃん・・・聞いたよ。ケンが自殺未遂だったって・・・」

「俺もテレビのニュースで観て知ったんです。幸い命に別状はないと・・・」

「そうか・・・良かった・・・隆ちゃんに言っておかなきゃいけないことがあるんだ。」

あのギターな・・・元々の持ち主は・・・デッドエックスのギター
ストHIDEの

物なんだ・・・」

「えっ？・・・」

俺は言葉を失った。デッドのHIDEといえば全盛期に自殺してしまったギタリストだ。

しかも同じバンドで3人も自殺している・・・

「それだけじゃない。俺の友達が所有する前に持ってたやつも自殺したんだ・・・

ここまでいえば分るだろ？あのギター・・・きつと何かある。もう手放した方がいい」

「ちよつと待つてください・・・確かにあのギターに係わった人達が自殺してるのは

分かりました・・・けど・・・それは偶然で・・・現に俺は自殺とか考えてないし・・・」

「じゃあもう一つ教えてやろう・・・俺が使ってたとき・・・俺のバンドのメンバーが

死んだんだ・・・事故だった。車でな・・・メチャクチャになってた・・・

200キロ近く出してたそうだ・・・事故で処理されてるけど・・・

」

俺はその話を聞きながら身体から力が抜けていくのが分った。

あの伝説のバンドデッドエックスのHIDEの死からケンの自殺未遂まで

明らかに繋がっているのが見えたからだ。

帰りの新幹線の中で俺はあのストラトとのことを考えていた。

手放せるのか？

あのギター無しでやっていけるんだろうか？

いや・・・手放したとして・・・それで済むのか？

まだ終わってないんじゃないのか？・・・現にHIDEが死んだあとギターは誰かの

手に渡っていたんだ。なのにメンバーが次々自殺した・・・

本当に因果関係があるのか？

答えは出なかった。

結局俺はギターを手放せないまま2月を迎えていた。

芳樹が死んで1年が経とうとしていた・・・

・> i 2 8 6 0 8 — 5 1 1 <

第11話

その日隆一は、4月からのツアーの打ち合わせに六本木にあるジャックレコードの
本社に来ていた。

先月レコーディングが終わった新しいアルバムの発売記念のライブになる。

「一応ドラムとキーボードはウチの方から用意するよ。キーボードはラッティの黒岩さんは隆ちゃん知ってるよね？ あとドラムはいつも通り岩瀬君。ステージングで何か希望とかある？」

ジャックレコードの担当者が流れ作業のようにスケジュールを決めてゆく。

少し遅れてきた正也も上の空のような顔をして相槌を打っていた。ケンは今日も来ていない。レコーディングには数回来たが、今回のアルバム9曲中

たった3曲だけの参加だった。あとは数名のスタジオミュージシャンが音入れている。

もちろんクレジットにはケンの名前しか出ないが・・・

「じゃあ・・・とりあえずこんな感じでいきましょう。細かいことはマネージャーの

鈴木さんに伝えますので。またいいライブをお願いしますよ」

ジャックレコードの取締役が隆一たちをエントランスまで見送りに来ていた。

ソニックエンジンは今やジャックレコードの稼ぎ頭といっても過言ではなかった。

「正也・・・たまには一緒に飯でも食おうや」

「そうだな。お前とメシ食うなんて久しぶりだもんな・・・高校時代はなけなしのバイト代持ってファミレスとか行ったよなあ」

「随分昔の話みたいなのがするな・・・どこ行く？久しぶりに渋谷にでも出るか？」

「渋谷なら知ってる店があるわ。あそこなら周りを気にしなくてもいいし・・・」

お前に紹介したい子も居るしな」

「なんだよ、彼女とか居んのかよ」

「ちげーよ。まあ行ったら分るわ・・・」

・>i28656—511<

正也が案内した店は道玄坂にあるビルの4階にあった。

見た目は普通の喫茶店のような感じだが、中に入るとレゲエが流れ照明もかなり暗くした

少し怪しい感じのバーだった。

そつえば正也は以前覚えい剤容疑で事情聴取を受けている。

この店はいかにもと言わんばかりの雰囲気があった・・・

「なんかヤバそうな店じゃん？ 大丈夫なのかよ？」

「ビビッてんのか？ 心配ないって・・・ほら、そのカウンター空いてっから」

大理石のカウンターに、黒く塗られた天井から吊り下げられた照明が怪しく反射していた。

「あら？ マー君今夜は一人じゃないんだあ？・・・えっと、バンドの方？」

正也の隣の席に黒髪が印象的な20代半ばの女性が座った。

切れ長の目から、黒い瞳が隆一に真っ直ぐ注がれている。

隆一はあわてて壁に張ってあるボブ・マーリーの写真に目をやった。

「そうそう・・・この前借りたCD聴いたわよ。結構いいじゃない。最初に借りたヤツの方が良かったかなあ・・・」

「この間のはデモだから・・・今度ちゃんとしたのをあげるよ」

「なんだよ正也。お前デモとか渡してんのかよ・・・会社にバレたらえらいことだぞ」

「まあ隆一君お堅い事言うなって。とりあえず何か飲もうぜ・・・俺はビール」

「ったく・・・未成年だぜ。じゃあ俺はジンジャーエール」

さっきまで正也の隣に居た女が隆一の右隣に座った。

そしていきなり隆一の頬を両手で挟みこんだ。

・・・!?

何なんだ・・・この女??

第12話

「この子があのギター弾いてるんだあ・・・」
そう言つと女は隆一の頬から手を離れた。

「あの・・・何のマネですか？ いきなり・・・」

「ゴメンなさい、あなたのこと見てあげたのよ。マー君言つてなかつたの？ 私の事・・・」

「わりい・・・突然連れて来たから。彼女はリリイちゃん・・・本名は岡本理恵子さん。」

身体に触れるだけで色んな事当てちゃうんだよねー。だから嘘つけないんだわ」

「色んな事つて・・・」

「そうね・・・こんな事が分るわ。あなた・・・えつと隆一君だっけ？」

隆ちゃんていいよね？ 子供の頃事故にあつてるでしょ？ バイクに跳ねられたの？」

「えっ！・・・なんで知つてるんですか？」

「だからー。お前のことなんか知らないの！ 彼女は。今触つて分つたんだよ。」

さつきから言つてるじゃん！」

「それからね・・・背中に傷があるよね？ 小学校の時プールで転

んだ・・・

あんた結構おつちよこちよいだったのね」

そう言いながらケラケラと笑い声をあげた。

「なんか・・・気持ちが悪いなあ・・・何でそんな事まで分るんですか？」

「私にも理由は分らないわ。だって・・・子供の頃からこうなんだもん。

最初は嫌だったわ。特に中学生の頃とか・・・スゴク敏感で相手の考えてることまで

わかちやうの・・・辛いよね。好きな男の子が誰を好きなのか分ったりしたら・・・」

「今でもスゴイじゃないですか。触っただけで・・・あとどんなことが分るんですか？」

「いろいろ・・・もっと長く触れていたら何でも分っちゃうかもよ？」

「あらら・・・リリイちゃん、隆一のことのが気になるんだあ・・・悔しいなあ。

じゃあ俺は奥で彼女達とちよつと踊ってくるわ。隆一、まあゆっくりしていけや」

「おっ・・・おい・・・勝手なヤツだ・・・」

「ふられちゃったの？　かわいそうに。まあ一緒に飲みましょうよ・・・

はい、カンパーイ・・・」

結局この日は明け方までこの店に居た。

正也は途中で女子大生風の女と別の店に行くと言って出て行ったきりだ。

リリイとは4時ごろまでとりとめもないことを話していたが、かなり酔ったのか

彼女は一人奥のソファで眠ってしまっていた。

隆一はずっとジンジャーエールだ。

5時過ぎに店が閉まるというのでリリイを連れて外に出た。

3月の早朝だ。酔っていても一気に醒めるほど寒い。

にもかかわらずリリイは相変わらずフラフラしながら隆一の腕に縋るように

寄り添ったままだった。

「家はどこなの？ 送るよ・・・」

「家？・・・家には帰らないのっ！　そこで寝る・・・あんた帰っていいから・・・」

「何言ってるんだよ・・・こんなところで寝たら死んじまうって・・・」

「じゃあ隆ちゃんの家で寝る。あっ・・・迷惑かしら？　彼女が待ってて・・・」

「一人暮らしたよ・・・しょうがないなあ・・・」

隆一はリリイをタクシーに乗せ、吉祥寺借りてあるマンションに向かった。

1
<

·
>
i
2
8
6
5
8
—
5
1

第13話

隆一が住んでいるマンションは吉祥寺の駅から5分ほど歩いた場所にあり、ツアーや

レコーディングの時以外はほとんどといって良いほどここに引き籠もっていた。

もちろん引き籠もるといってもゲームをしたりするわけではなく、ギターの練習を

しているか好きな音楽を聴いているというような生活である。

部屋は1LDKで12帖のLDKと8帖のベッドルームだ。

LDKには3人掛けの白いソファーと55インチのテレビ、それにブギーのアンプが

置いてあり、壁全体に収納棚が作り付けられていた。

「おじゃましーす・・・そっか、やっぱり誰もいないんだ・・・」
少し酔いが醒めたのかさつきよりはまともな口調でリリイが言った。

「まあ、何にも無いけど・・・くつろいでくれよ」

「ホント・・・何にも無いんだねー。シンプルでいいじゃん。
このソファーで寝ていいの？」

「そっちは俺が寝るから、あんたはベッドで寝ればいいよ」

「そんなの悪いわよ。わたしこっちでいい」

「じゃあ好きにしろよ・・・俺ちよつとシャワーしてくるから」

「あっ、いつてらっしやーい・・・・・・・・・・さてと・・・」

リリイは周りを見渡した。その視線は何かを探しているかのようである。

「あつた！……これかぁ……」

リリイが見つけたのは黒いギターケースであつた。

壁の収納棚の一部がギター置き場になっていて、アコースティックやエレキが

数本ずつケースに入って保管されていた。

「これがあのギターね。……えつと……どうやって開けるんだ？これ……」

ケースにはダイアル式の鍵が掛かっていて番号を知らなければあけることが出来ない。

リリイは適当に回しながら何度も開けようと試みたがそれは徒労であつた。

「何やってるんだ？……勝手に触るなよ……大事なギターなんだぞ、それ」

「知ってるよ……いわく付きのギターなんでしょ？」

「あんた何でそれを……」

「言わなかったっけ？ 触れば何でも分っちゃうつて……」

このストラトの件は俺と川上先輩しか知らないはずだった。

まだメンバーにも何も言っていない……

この女……数本あるギターの中から何故それだと分ったんだろう？

「わたしが何でこれだとわかったか知りたいの？」

「えっ！？……………」

「マー君……正也君にねこの前CD借りたの。それでちょっと気になることが

あったのよ。そう思ってたらず昨日あなたたちが来たでしょ？ ビックリしちゃた」

「気になることって……なに？ 音を聴けば分るようなこと？」

「1枚目のCDと先日デモ……聴き比べるとはつきり分るわ。確か……1枚目を録り終えて少ししてドラムの方が亡くなってるのよね？」

「そうだけど……」

「あなた、多分わかってたと思うけど……このギター手に入れてから一番変わったのドラムの人だったんじゃない？」

「……ああ、芳樹はおとなしいヤツでなかなか前面に出る演奏が出来なかった。

それなのにこのギターで弾きだした途端、性格が変わったように叩きだしたんだ」

「やっぱりそうだったのね。このギターにはきつと何か秘密があるわ。

それを解き明かさなきゃ……」

「どうなるんだ？ 解き明かさないと……」

「またメンバーが死ぬことになる。正也か・・・ベースの人・・・」

「なんだって！？ それはいつなんだ！？」

「まだ少し時間はあると思うの。1週間？2週間かなあ・・・」

「そんなに早く？どうすればいいんだ？どうやったらアイツらを守ることができる？」

俺は藁にも縋る思いで、この女に全てを話すことにした・・・

> i 2 8 6 6 2 — 5 1 <

第14話

俺はリリイという女に先日名古屋で聞いた川上先輩の話を全て話した。

本当にあと数日で正也かケンが死んでしまうのか？

正直、信じられないというよりは信じたくない気持ちでいっぱいだった。

「とりあえずギターを見せてくれないかなあ・・・」

言われるままケースからギターを取り出し彼女に渡した。

「へー・・・結構傷だらけなんだね。どの位前のもののなの？」

「多分1960年頃のモデルだと思う。ただパーツは色々変えてあるみたいけど」

リリイはソファアに座るとギターを抱きしめるような格好をして目を閉じた。

そして数分の沈黙のあとゆっくりと目を開け話し出した。

・> i 2 8 7 2 1 — 5 1 1 <

「隆一君、今から言うことは多分あなたにとってかなり苦しい選択を迫ることに

なると思うから・・・少し覚悟しておいてね。このギターを一番最初に持ってた

人はね、アメリカ人で・・・南部の農家で働いていた貧しい黒人の男の子。

彼は夢を実現させる為に15歳の時シカゴに出てきたの。

彼の夢はミュージシャンになってお母さんに楽をさせること・・・子供の頃から安物のギターを弾いていて、地元の村のダンスパーティーなんかでは

10歳の頃から演奏させてもらってたの。

でもシカゴに来て、ろくな楽器も持っていない彼にはどこにも演奏する場所がなかった。

彼は楽器店からギターを盗むことを思いついたの。ウインドに飾られているギター。

真っ白なギターは彼にとってとても手が出せない代物だったわ・・・

「

「白いギター？・・・」

「そう。これは色を塗り替えてあるの。元の色は白・・・そのままだと盗んだことが

すぐにバレてしまうものね。このギターを手に入れた男の子は色んなクラブで

演奏させてもらうことが出来たわ。ギャラのほとんどは田舎に居るお母さんに

送金してたみたい。でも彼が19歳の頃ジャズクラブで知り合ったマフィアに

マリファナを奨められから、彼の人生は変わってしまったの。

彼はドラッグにおぼれて行って・・・手が震えて演奏もままならなかった。

そしてまた無一文になったわ。でもドラッグは止められない。彼は護身用を買ってあったコルトをこめかみに当てた・・・」

「自殺したのか？」

「そう・・・彼が21歳のバースデイの前日・・・」

「彼の死を発見したのはバンド仲間の白人の男性。とても優しくそんな人だわ。」

ドラッグに溺れていく少年を何度も立ち直らそうとしていた。葬式が終わって

彼の形見のギターを大切にしていっつも彼の事を思い出していたみたい。

でも、それが良くなかったんだけど・・・」

「友達を思い出すことがよくない事だった?」

彼女は少し悲しそうな顔をして続きを話し始めた・・・

第15話

「自殺した人の魂ってどこに行くと思う？」

「どこに行くって・・・天国とか地獄とかそういう話？」

「そう・・・人は死ぬとね、魂がもとあった場所に帰っていくの。なんだろ・・・」

宇宙みたいな空間・・・すごく高い場所にあるんだけど、何年もかけて

そこに帰ってゆく。でもね、自殺した人の魂はそこには登ってゆけないの。

私たちが生活いる場所と同じ所に何百年もの間留まってる。それはとても苦しい

ことなの。彷徨い続けるんですもの・・・一人ぼっちで。

だから思い出してくれたりする人の所へ現れるの。優しくして欲しいのよね。

でもそれは生きてる人にとっても厄介なこと。

取り憑かれるって聞いたことあるでしょ？ ああいう状態なの。

病気になったり事故に巻き込まれたり、事件を起こしたり・・・

この白人の男性の場合はそれだった。

店に来ていた酔っ払いの客と喧嘩になって、撃ち殺しちゃったの。

自分でもどうしていいか分らず逃げ出したんだけど、追いかけてきた警官に発砲して

射殺されたわ。5発も弾を浴びて・・・彼の家にあった物は殺された酔っ払いの客の

家族に渡す賠償金の為に換金された。また一人きりになった黒人の魂は

ギターと供に新しい持ち主に取り憑いたの・・・

このギターを持った人は必ず事件に巻き込まれている。
自分がなんでも無い時は周りの人が死んでる・・・」

「呪われたギターっていうことなのか？」

「最初の男の子が悪さをしたのは数回・・・あとは巻き込まれて自殺した人たちが

次々と違う人に取り憑いて行って・・・」

「じゃあ正也やケンは・・・ひょっとして芳樹の霊が？」

「そう・・・芳樹君っていう人、今はケン君のところに居る」

「何だつて！ どうすればいいんだよ・・・このままじゃ・・・」

「わたしが言う通りにすれば大丈夫だから。忘れるといけないからメモして。

まずケン君のところへ行くの。このギターを持って。そしてケン君を連れ出して

高見神社に行つて。地図は後から渡すから。そこでこのギターを燃やして欲しいの

宮司さんには私から話しておくから、持っていくだけであとはお任せすればいい。

そして帰ってきたら1週間、毎日塩で家や自分を清めて。ケン君は勿論だけど

正也君も出来ればしたほうがいいわ。 どう？出来るでしょ？」

「ああ・・・それぐらいなら・・・」

そう言いながらもギターを燃やしてしまうことに少し躊躇いがあった。

もうこのギターを弾けなくなってしまうのが辛かった。
でも早くしなければケンが自殺してしまうかもしれない・・・
1秒でも無駄には出来ない。

「じゃあこれからケンの所へ行くよ・・・」

「わたしが着いて行けばいいんだけど・・・芳樹君の霊に気づかれると

どこかへ逃げていってしまうから・・・宮司さんにはすぐに電話をしておく。

それとこれが地図ね。がんばって。きつと上手くいく・・・

ケン君には電話しないで突然行ったほうがいいわ」

俺はギターをケースにしまうとタクシーを呼びケンの家に向かった。

第16話

タクシーの窓から街並みをぼんやりと眺め、色んな事を考えていた。このバンドを結成して初めてのライブのことや、バンドコンテストのこと。

このギターで初めて音を出した時のこと・・・

マーシャルから聴こえるあの音をもう二度と聴けない。

そう思った途端なんとも言えない感覚に襲われた。

「運転手さん！ その交差点で止まって！」

練馬区にある練習スタジオの前で車を止め慌てて降りた。

1曲だけ・・・もう1曲だけ弾いてからでも・・・

最後にコイツの音を思いっきり耳に焼き付けてから別れよう。

スタジオブースに飛び込むと焦るようにマーシャルにシールドを差し込んだ。

「この音だ・・・すべてはここから始まった・・・」

演奏を終えハウリングの感触を楽しみながらも、俺は惜しむようにメインスイッチをオフにした。

「終わった・・・これで全て終わるんだ」

タクシーを拾いケンの家に向かう途中、自分を言い聞かせるように何度も同じ言葉を呟っていた。

ケンのマンションに行きインターホンを鳴らすと聞き覚えのある女性の声が聞こえた。

中学校の時よく遊びに行ったとき聞いたケンのお袋さんの声だ。

「まあ・・・隆ちゃんじゃない！入って・・・」

「どうもお久しぶりです。ちょっとケンに話があって・・・」

「そうなの。さっきちょっとコーラを買ってくるって出かけたから・・・
もうすぐ戻るんじゃないかしら」

「そうなんですか・・・じゃあちよつと待ってます」

ケンのお袋さんは最近伏せがちな息子を心配して、4日ほど前からここに来ている
らしかった。

俺達の子供の頃の話や最近の芸能ニュースのことなど、たわいも無い話をして
時間をつぶしていたが30分経ってもケンは戻ってこなかった。

「どうしたのかしらあの子・・・隆ちゃんが来てるのに・・・」

俺は変な胸騒ぎを感じすぐにリリイに電話をかけた。

「気づかれてる・・・」

リリイはそう言うつとすぐにこっちに来るといって電話を切った。

気づかれた？　なぜ？

俺は焦った。あのスタジオに居た20分が無ければケンはまだ家に居たはずだ。

取り返しのつかないことをしてしまったのではないのだろうか？
祈るような気持ちでケンの帰りを待っていた。

40分ほどしたころリリイが到着し、俺は彼女と一緒にケンの行き
そうな

場所に向かった。

ケンのお袋さんの話では、小銭を持って行っただけで財布も机の上
に置きっぱなし

だったそうである。歩いていける範囲でケンが行きそうな場所・・・
東京の空気が余り好きじゃないといったケンだが、以前隆一が遊
びに行った時

ここだけは好きだといっていた場所ある・・・

二人は荒川沿いにある小さな公園を目指した。

「無事で居てくれ・・・」

俺は心の中で何度も叫んでいた。

第17話

この時間の公園は人影もまばらで、すぐにケンを見つけることが出来た。

「よかった・・・無事だったか・・・」

「どうしたんだ隆一？・・・よく分ったなここが」

「ああ。さっきお前のマンションに行っただけど・・・とにかく無事でよかった」

「無事でつて・・・何の話だ？」

俺はリリイから聞いた話をケンに伝えた。

最初は笑いながら聞いてたケンも、思い当たることがあったようで顔を強張らせながら俺を見ていた。

「いま隆一君が言った通りにすれば、あなたに取り憑いている霊は諦めて別の場所へ行くわ」

「隆一・・・いいのか？そのギター燃やしてしまつて」

「お前の命が掛かってるんだ。そんな事言ってる場合じゃないだろ？」

「二人とも聞いて。靈感の強いわたしが一緒に着いてきたことによ

って芳樹君の霊は

一時的にどこかへ退散してるはず・・・でもまた戻ってくるわ。

今夜2時過ぎにケン君の身体に取り憑いた瞬間を狙って除霊するの。

そうすれば二度と現れることは無いでしょう」

「ありがとう。じゃあ俺はこのままケンの家で待機していて、0時を過ぎたらコイツを

連れて高見神社に行くよ。色々ありがとう・・・君がいなかったら・・・」

「気にしないで。今度お昼ご飯おごってもらうから。くれぐれも気をつけて・・・

ケン君から目を離しちゃダメよ」

「ああ。分った・・・」

リリイが帰ったあと俺たちはケンのマンションでお袋さんの手料理に舌鼓を打っていた。

「どうかしら？隆ちゃんの口に合った？」

「久々のお袋の味って感じでメツチャ美味いっす」

「そう。よかった・・・健一も沢山食べなさいよ。アンタ痩せすぎなんだから」

「分ってるよー。隆・・・俺、このマンション出て実家に帰ろうと思う。」

東京は何かと便利だけど・・・俺の肌に合わねーわ」

「いいよ。ギターがなきゃバンド続けられるかどうかもわかんねーし……」

「ホントにいいのかよ？それで……」

「ああ。もっと早く気がつけば芳樹もあんな目に合わずに済んだんだ……」

兎に角、俺達の手でこの連鎖を断ち切らなきゃ」

「そうだな。ギターが存在するかぎり続いていくんだもん……」

深夜0時を回った頃二人はタクシーで高見神社に向かった。

リリーの知り合いの宮司が居るといってその神社は、埼玉に入って少し走ったところに在った。

それほど大きくはないが静かな佇まいで、深夜のせいか少し怖い感じすらした。

「なんか肝試しみたいだなあ……そういえば軽井沢のペンションでよくやったよな」

「そうだな……それほど時間は経ってないのに随分昔のことがよくな気がする……」

神社の中に入ると、リリーの知り合いだという宮司さんが小さな穴を掘っていた。

「やあ。君たちが……理恵子さんから話は聞いてるから。じゃあもう暫くしたら

始めようか・・・多分2時過ぎに何か変化があると思う・・・」

俺たちは静にその時を待った。

腕時計の針が2時15分を示した辺りでケンが少し身震いした。

「寒いのか？」

「いや・・・なんか急に・・・ゾクゾクって・・・」

「入ったようですね・・・じゃあ始めましょう」

宮司は何か唱えると二人の前で清めの儀式を始めた・・・

> i 2 8 9 9 8 — 5 1 1 <

第18話

「それではお二人とも頭を下げてください」

宮司が大麻を左右に振りながら言った。

儀式のようなものは10分ほど続き、隆一にギターを取り出すよう指示した。

「ホントにいいのか？」

ケンがすまなさそうな顔をして隆一に言った。

「さあ、終わらせよう・・・」

宮司は、隆一のギターを先ほど掘った穴に組まれた薪の上に丁寧に置いた。

「さあもう一度深く頭をお下げください・・・」

そういうと薪の下に敷かれた半紙に火を点け、再び大麻を振った。

パチパチという音と共に徐々に炎が大きくなり、その先が黒いストラトキヤスターの

ボディを炙りはじめている。

暫くすると黒い塗装部に一気に火が回りあつという間にギターは炎に包まれた。

最初に細い1弦が悲鳴のような音をあげて切れ、次々と何かを断ち切るように

弦が悲鳴をあげていた。

メイプルのネックの付け根が嫌な音をたてて折れた瞬間、ギターは

組まれた薪の中に
落ち、さらに大きな炎に包まれた。

30分ほどの時間だったろうか、もっと長かったのだろうか・・・
金属部がそこにギターがあったことを示さなければ、何を燃やした
のか分らないほど
綺麗な灰の山が出来ていた。

宮司は再び二人の前に立ち大麻を振った。

「これで全て終わりました・・・」

「ありがとうございます。こんな遅い時間に・・・なんとお礼を
いつていいのか」

「隆一さん・・・でしたよね、わたしが出来る事はここまです。
あとは君たちが
しっかりとした気持ちを持って生きていつてください。生活の乱れ
やちよつとした
心の隙間を彼らは見逃しません・・・規則正しい生活を心がけてく
ださい」

俺たちは宮司に心から感謝の気持ちを伝え神社を後にした。

既に東の空が少しだけ明るくなり始めている。
俺は新しい人生が今始ったかのような気持ちがしていた。

第19話

「隆ちゃん、あのギター無くても結構いけるじゃん」

キーボードの黒岩さんが足元をふらつかせながら隆一に話しかけてきた。

ツアーも中盤にさしかかった6月の初頭にスタッフ全員でささやかなパーティを開いた。

前回から参加してくれてるドラムの岩瀬さんの誕生日という名目だが、まあ慰安を兼ね

どんちゃん騒ぎをしようということらしい。

さすがに未成年のメンバーには酒を勧めるものは居なかったが、みんな少しは酒を口にしていた。

「ありがとうございます。でもこのツアーは黒岩さんのキーボードにかなり

助けてもらってますから・・・後半戦もよろしくお願いします」

「いやいや、こっちこそ・・・それにしてもケンちゃん随分元気になつてきたね

一時はどうなるかと思ってたけど・・・あの調子ならファイナルまで問題なさそうだ」

確かにケンはある日以来、人が変わったように明るくなっている。

ケンだけではない。正也も以前のようにギャグを言ったり軽いいたずらで人を

笑わせたりするようになっていた。

やはりすべてはあのギターの影響だったのだろうか・・・

ふと炎に包まれ断末魔のような音をたてていたストラトのことを思

い出した。

もしあのストラトに出会ってなければ今のバンド活動は無かっただろう。

マーシャルから出る図太いサウンド。

その音に誘われるように次々とアドリブが出てくる・・・
もう2度と経験することが出来ないのかもしれない。

「隆一この後どうする?」

正也とケンが宴を持て余すようにこちらにやって来た。
さすがに酒も飲まずに何時間も騒ぐなんて所詮無理なことだ。

「どうするって?どこか行くの?」

「リリイちゃんの居る店に行こうって話してたんだけどさ、お前も行くだろ?」

「こいつがもう一回会いたいんだってさ」
そう言って正也がケンの肩を叩いた。

「いや・・・世話になったし・・・ちゃんとお礼を言っていないから・・・」

「正直に言えよ。年上だけど結構可愛いからな、リリイちゃん」
正也がからかうようにケンを見た。

「じゃあ3人で行くか。俺も礼を言いたいし・・・」

「よし決まった!ジャーマネに先に帰るって言うてくる」

店のドアを開けると今夜は客数も少なく、リリイがウェイターと暇そうに話していた。

そういえば入る時この店の名前がバツカスだということに始めて気がついた。

ローマ神話の酒の神様が店の名で流れている音楽がレゲエとか・・・人をおちよくったようなコンセプトだ。

「あら？まーくん・・・それに隆ちゃん。えっと・・・あなたは・・・」

「ケンです。先日はありがとうございました」

「コイツがリリイちゃんに会いたいつてうるさくてさー、パーティー抜け出して

きたんだ。なあ隆ー」

「ホント・・・この間はお世話になりました」

「いいのよ・・・それよりちょっと気になることがあるんだけど・・・」

そついうと先日のように隆一の頬に両手をあてがった。

「やっぱり・・・」

「どういことですか？ やっぱりって・・・」

「あれだけの霊が取り憑いてたのにあなた自身には何も起きなかったから・・・」

ちよつと不思議だったの。これで分ったわ。あなたには凄い霊が最

初から憑いてるの

何千年も前の人だわ・・・神様って呼ばれてた人」

「神様？・・・どういうこと？」

「あのね、大昔は音楽なんかをするのは神様と呼ばれた特別な能力の持ち主しか

許されてなかったの。その中でも何人もの心を引きつけたような演奏者を

人々は神様といって崇めていた。雨乞いの儀式や 婚姻の席 人の死・・・

どの場所でも神様と呼ばれた人が音楽を奏でていた。そんな人があなたの後ろに立ってるの」

「凄いじゃん！隆一。そんな人に守ってもらってるかよ」
正也がちよつとふざけたように言った。

「そうよ、まーくん。ちゃんと崇めなさい」
そう言ってリリイは笑っていた。

リリイの話は嘘ではないんだろう。でもまったく実感は無かったし、だから

どうなんだよって、その時は気にもしていなかった。

そつ・・・あの事件が起こるまでは・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4148v/>

悲しみのストラトキャスター

2011年8月27日12時45分発行